

第一問 次の文章は島田潤一郎しまだじゅんいちろうの「大学の教室で」という文章の一節である。筆者は大学一年生の時に受講した「日本文学を考える」

という授業が面白かったので、翌年同じ先生による「文章表現」という授業に出席するようになった。受講生一〇人に満たないその授業で、筆者はその先生の指導を受けたり、同級生Hの書く小説や彼の勧める小説にも影響を受けたりして、小説を書くようになる。以下はそれに続くこの文章の後半部分である。これを読んで、後の問いに答えよ。

先生は、小説をとおして考えなさい、といった。

ぼくはその言葉の真意が何度聞いてもよくわからなかったが、とにかくHや作家たちの文章を真似まねして、毎日ワープロに向かって小説を書いた。あるときはHのスタイルそのままに、母の生まれ故郷である高知を舞台に短篇を書き、あるときは海外文学の真似事をして、パリの郊外を舞台に小説を書いた。またあるときは暴力を正面から描いた長篇を書き、あるときは「義眼」をモチーフにさらに長い小説を書いた。

幸運なことに、ぼくは大学四年生のときに、その「義眼」をモチーフにした小説で大学から賞をもらった。それは「日大文芸賞」という、日本大学全学部の学生を対象にした小説コンクールだった。選考委員の黒井千次くろいせんじさんが寸評で「ここに小説がある」と評してくれたことがぼくに自信を与え、結局、大学を卒業してさらに五年間、定職にも就かず、小説を書き続ける日々を送ることになった。

「とにかく、書き始めること。そして一度書き始めたなら、最後の一字までなんとしても書き切ること」

佐藤先生は口をスつぱくして、ぼくたちにそう伝えた。

それが「小説をとおして考えなさい」という教えとほとんど同じ意味であるということに、ぼくは二〇代の半ばになってようやく気づいた。

最初は自分でもなにを書きたいのか、よくわからないのである。ただ、書きたいシーンや、セリフのようなものがなんとなく

あって、そこへなんとか辿り着こうと四苦八苦して文章をひねり出す。

ひとつの文章を綴れば、その文章が次の文章を導き、その文章がさらにその次の文章を育む。その繰り返しで、数万字の小説を綴る。費やす時間は、ひとつの作品にたいしてほしい半年から一年ぐらいだ。

ミステリーなどのエンターテインメント小説であれば、物語にははつきりとした結末が用意されていて、作家はそこに向かつて、チミツに文章を構築していくのだと思う。

けれど、ぼくが先生から教わった小説は、^① そういうものではなかった。

「作家ですら、なにを書こうとしているのかはわかっていないのだ」というのが先生の考え方で、だからこそ、小説はおもしろいし、スリリングなのだ、と先生はぼくたちに伝えた。

それはいまにして思えば、先生の、人生にたいする態度のようなものであった。

そのころ、ぼくが夢中になって読んだ小説に、ミラン・クンデラの『存在の耐えられない軽さ』があり、その長篇の冒頭には次のような一節がある。

「人間というものはあらゆることをいきなり、しかも準備なしに生きるのである。それはまるで俳優がなんらの稽古なしに出演するようなものである。しかし、もし人生への最初の稽古がすでに人生そのものであるなら、人生は何の価値があるのであろうか？（略）」

アインマル イスト カインマル
Einmal ist keinmal（一度は数のうちに入らない）と、トマーシュはドイツの諺をつぶやく。一度だけおこることは、一度もおこらなかったようなものだ。人がただ一つの人生を生きうるとすれば、それはまったく生きなかったようなものなのである」

ここに書いてあることはつまり、自分の人生というものはそれがたった一度である限り、練習することも、理解することもか

なわないということだ。ひょっとしたら、臨終の際きりになってようやく、「わたしの人生はこうだった」と認識し、理解できるものなのかもしれないが、そのときにはだれかに伝える術がない。

② 若い頃は、クンデラのその指摘に驚き、そして不思議なくらいに胸を打たれた。

というのも、それまでのぼくは人生になにかしらの意義があり、目的があつて、その目的に殉じるようにして生きなければならぬのだと思つていたからだ。

それは裏返してみれば、自分の人生には揺るぎのない価値があるということであり、ぼくが欲していたのは、その「揺るぎのない価値」にふさわしい言葉を与えるということであつた。

もちろん、作家は小説を通して「人生に価値などない」といつているわけではなかった。事實はたぶんその逆で、作家たちはみな、小説という器をつかつて、人生の価値をあらゆる角度から計測しようとしていた。

ある小説は主人公の父母が偶然出会うところからはじまった。ふたりは結婚し、数年後に物語の主人公が生まれる。彼は学校でさまざまな友人たちに出会い、社会に出て妻に出会い、子育てを経験し、自分の人生とはなんであるかを考え、しばし歩みを止める。

またある小説はだれもが知る歴史上の人物に、日々のディテールを与え、その偉大とされる人物がぼくたちとまったく同じように些細ささいなことで喜び、悲しむ人間であることを物語った。

またある小説はたくさん登場人物を巧みに書きわけることで、たったひとつの事実が見る人によつていかに異なるかを描き、とどのつまり、社会とはどういうものであるかを意欲的に解き明かそうとした。

読む小説のすべてが手本だった。最初から最後まで力ちからンペキだと思わされる小説もあれば、最後の数ページでそれまでの単調な印象をすべて吹き飛ばすような快作もあつた。

ぼくは小説を書く技術を学ぶためというよりも、どのようにしてこの物語は終わるのか、そればかりを気にしながらページを

繰った。

ありきたりの結末にたどり着けばがっかりしたし、どんでん返しのような終わり方にも興醒めをした。ここに書いてあることは本当のことではない、と思った。

大学を卒業してしまうと、小説のことをだれかと話すという機会はめっきり減ってしまった。Hは英語を勉強するといってアメリカに留学し、文芸研究会の先輩たちも、社会に出ると、小説の話よりも仕事の話のほうを重んずるようになった。卒業した翌年、アルバイト先のコンビニエンスストアで偶然、ぼくが毎月愛読している雑誌のライターと知り合うということがあり、その人とはたまに本や音楽の話をしたが、ぼくがある日小説を書いていると打ち明けると、その人は急によそよしくなってしまった。

アルバイトは夜の一〇時にはじまって、翌日の午前八時に終わった。朝の冷たい空気のなか、会社に通勤する人たちとは反対の方向に自転車をこぎ、家賃一万八〇〇〇円の木造アパートで賞味期限切れの弁当を食べながら、アルバイトに行く直前まで書いていた小説を読み返した。

よく書けている、と思うことはめったになく、たいてい眠くなる直前まで小説を書き直した。

けれど、夕方に目を覚ますと、朝方にぼくが手を入れた小説はさらにひどくなっていると気づくことのほうが多かった。

この小説がよいものか、悪いものなのかが皆目わからず、感熱紙に打ち出して、いろんな場所で読んだ。

駅前のファストフード店。公園。図書館。小田急線。京王線。山手線。

けれど、結果はいつも同じで、ぼくの小説はせいぜい「ところどころ、いいところがある」ぐらいのレベルなのだった。

「なにかが終わったと感じたときに物語が立ち上がるのです」

教室のなかで、先生はそうもいっていた。

たとえば、だれか身近な人が亡くなったとき、ぼくたちはその人についてなにかを語りはじめたくなる。ひとつの人生の幕が降り、残された者の前にはその人を語るための材料がすべて出揃ったからだ。

パートナーと別れたときも、その構図はそんなに変わらないう。喫茶店で、酒の席で、または終わらない長電話で、語り手はどのようにしてその恋人と別れたのかを聞き手に向かって訥々と打ち明ける。

話すことによつて初めて、たしかめられる何かがある。あるいは、発見できる何かがある。

語り手は相手のところのいちばん奥にまで届くように、さまざまな工夫をこらして恋の顛末を語る。物語に強弱をつけ、うろ覚えであるはずの恋人の台詞を再現し、重要なシーンでは、それがいつ、どこで起こったことだったかはもちろん、相手の服装や、本筋とは一見関係のない会社の人間関係などについても言及をする。

相手が「うん、うん、そのとおりだ」といつてくれれば、気持ちもおさまる。けれど、「きみはほんとうにそれでいいのか？」とか、「きみはまだ相手のことを変わらずに好きなのではないか？」などといわれようものなら、終わるはずの物語は終わらなくなる。

店を出て（あるいは電話を切り）、語り手はもう一度、恋人とのことを思い出す。

ところのなかには、今もなお生々しく記憶に残り、うまく消化できないなにかがある。

ほんとうはその「なにか」をうまく言語化し、だれかにきちんと伝えてみたい。

けれど、そのことを話す回路のようなものをどうしても見つけることができない。

おそらく、このようなことと、ワープロに向かって小説を書くということはとても似ているのだ。

小説家を目指していたころのぼくのころのなかにもまた、言語化し、物語化して、読み手のところのいちばん奥深いところに届けたいなにかがあった。

それはたとえば、ぼくひとりだけが見た、なんてこともない光景であつたり、忘れられない家族の仕草だつたり、友人たちとの間で流れていた他愛もない空気だつたりした。

——なぜか忘れられないんだ——

ただそういつて、その光景をそれとなく誰かに話せばよかったのかもしれない。

あるいはいまだつたら、それを丁寧に文章に起こし、またはスマートフォンのカメラにおさめて、SNSに投稿すればいいのかもしれない。

けれど、^④ぼくはただ伝えたいだけではなかった。

ぼくは、ぼくが感じたとおりに、相手にもその一瞬の光景に感じ入ってもらい、そして出来れば、それを永遠に忘れないでいてほしかったのだ。

締め切り日の夜の一時を過ぎたところに、急いで小説を打ち出して、夜間窓口のある郵便局へ自転車飛ばす。ぼくは局員に「速達でお願いします」と告げて、文学賞の応募先に原稿を送る。

いちばん達成感があるのはこのときで、自分へのご褒美とばかりに自動販売機であたかい缶コーヒーを買う。

最初のうちは、その小説がどこかの新人賞に選ばれ、先生に「ついにやりました！」と電話で報告する未来を頭のなかで思い描いている。

けれど、一次選考にも通過しないという現実が何回も続くと、先生のこととも思い出さなくなり、小説家という未来のこともまったく考えなくなった。

——ぼくは青春を棒に振ったのだろうか？——

何度か、そんなことを思った。

同級生たちのほとんどは大学を卒業すると同時に会社に入り、それぞれの場所でキャリアを積み重ねていた。

小売店に勤務する者は地方に転勤をして、現場で管理職を務め、教員を目指して採用試験の勉強に励んでいた者は、試験に合格し、すでに教壇に立っていた。平成の金融危機によって会社が倒産し、やむなく転職をした同級生もいたし、必要なのは資格

だといって、早々と会社を辞めて専門学校に入り直した同級生もいた。

ぼくだけがいまだに大学時代のことをずっと思い出し、考えていた。

その四年のあいだになにか特別なことがあったわけではなかったし、ぼくには恋人もいなかったし、告白も、落第も、病気もなかった。

でも、その平坦な四年間のことを反芻^{はんそう}して、それを言葉にし、物語にしようとするものがいていた。

⑤ 人は物語をとおして、さまざまなことを理解しようとする。

ぼくが小説を書くという経験をとおして学んだのは、一言でいえば、多分そういうことだ。

だれかはだれかのことを好きで、だれかはだれかのことをネタましく思っていて、だれかはとにかく、みんなよりも偉く、立派になりたいと願っている。

もちろん、それらは日々揺れ動く人間の気持ちのひとつの側面ではないが、その側面を重ね合わせたり、離したり、いがみ合わせたりして、人は自分の身に起こっていることや、過去のさまざまな出来事を真剣に理解しようとしている。

喜劇や、悲劇や、勧善懲悪や、快復や、自己実現の物語。大げさにいえば、歴史だって、民族という概念だって、そのような単純化した物語以外ではないはずだ。

一〇〇年前の、一〇〇〇年前の人々の気持ちや行動を想像し、理解するベースは自分の気持ちであり、経験であるが、かつて親に読んでもらったり、自分の力で読み進めたりしたたくさんの絵本や、マンガや、小説や、スクリーンで見えてきた数々の映画もまた、遠くの人たちのことを考え、想像することのベースになっている。

大好きな恋人がいなくても、長年抱いていた夢が叶^{かな}わなくても、親しい人が病とたたかっていたいなくても、人生は続くし、毎日続く。

仕事をし、食事をし、電話で親と話し、テレビで好きな芸能人を見て、なんとなくどこかへ行きたくなって、最寄りのコンビニへ足を運ぶ。

こうした日々の行為は、当人だけが知り、記憶していることで、その当人がいなくなってしまうえば、だれもがそれを知る機会を失うだろう。

そうした毎日のなんでもないことこそがかけがえないのだ、といたいわけではない。

けれど、たとえば、ひとりで夜道を歩いていて、突然むかしの友だちを思い出して連絡をとりたくなったり、月がきれいだと思ったり、木々の匂いに胸をつまらせたり、お店の店員がすごく感じがよかったり、悪かったり、眠れなかったり、夢でお母さんに会ったり、むかし飼っていた猫に会ったり、そうしたことが語るに値しないということはないはずだ。

⑥ ぼくも、友人たちも、ある時期、そうしたことばかりを小説に書いた。⑥ ぼくは大学生のころの彼らの顔や声よりも、彼らが書いた小説のシーンのほうをなぜか、よく覚えている。

(島田潤一郎『長い読書』による)

注 黒井千次……一九三二年生まれの日本の小説家。

ミラン・クンデラ……一九二九年チェコスロバキア(現チェコ)生まれのフランスの作家。二〇二三年没。

感熱紙……熱を感知することで色が変化する紙。インクを使用せず印刷する際に使われる。

問一 二重傍線部 a ㄣ e のカタカナを漢字で書け。

問二 傍線部①「そういうもの」とは小説に対するどのような考え方か。説明せよ。

問三 傍線部②に「若いぼくは、クンデラのその指摘に驚き、そして不思議なくらいに胸を打たれた」とある。若いぼくは、クンデラの指摘のどのような点に驚き、胸を打たれたのか。説明せよ。

問四 傍線部③に「終わるはずの物語は終わらなくなる」とある。「終わらなくなる」のはなぜか。説明せよ。

問五 傍線部④に「ぼくはただ伝えたいだけではなかった」とある。「伝えたい」以外に何をしようとしていたのか。説明せよ。

問六 傍線部⑤「人は物語をとおして、さまざまなことを理解しようとする」とはどういうことか。説明せよ。

問七 傍線部⑥に「ぼくは大学生のころの彼らの顔や声よりも、彼らが書いた小説のシーンのほうをなぜか、よく覚えている」とある。筆者が「小説のシーン」のほうを「よく覚えている」理由は、筆者の考えをふまえるとどのように考えられるか。説明せよ。

問八 波線部「小説をとおして考えなさい」という言葉の「真意」を、筆者はどのように捉えることになったのか。本文中にある次の四語のすべてを使いながら百五十字以内で説明せよ。

人生 言葉 理解 記憶

第二回 次の文章は、古谷田奈月「風下の朱」の一節である。駿足好打の二塁手として中学・高校の六年間をソフトボールに打ち

込んだ女子学生の「私」(梓)は、大学入学後は別のことを始めようと考えていたところ、大学生協の前で上級生の「侑希美さん」から部員が三人しかない野球部に勧誘されて、練習場に連れていかれる。これを読んで、後の問いに答えよ。

ソフトボール場を過ぎると道はだんだんと獣道のようになり、やがて完全な草むらに成り果てた。早くも夏めいた陽射しに頭を焼かれていたせい、私はまるで夢へと渡るような心地でその草むらを歩いた。このまま進んでも野球場になど永遠に辿り着かない、とそうして歩きながらなぜか確信したが、ソフトボール場から離れるほどに気持ちは高ぶり、目の前で揺れる侑希美さんの黄色いフレアスカートをガイドの手旗のように見つめて進んだ。行ったことのない場所に行けることだけは確かだった。

野球場には辿り着かない、という私の予感半分だけ当たっていた。不意に尽きた草むらの先に、まるで青草の海に浮かぶ小島のようにぽっかりと現われたのは、バックネットもダートサークルもピッチャーマウンドもない、野球場にはとても見えない空き地だった。それでも、朽ちる寸前のいびつなフェンスにどうにか外縁を辿らせることで何らかの場所であることは示していたし、野球部員を名乗る先輩たちが練習の準備を始めた以上、少なくとも、彼女たちがいるあいだは野球場であるはずだった。フェンスの向こう側には、田植え前の寂しい田んぼがどこまでも広がっていた。

グラウンド上には今にも消えそうな白線でダイヤモンドらしき四角形が描かれており、三塁側には錆びたベンチが、一塁側には、やはり屋根の錆びたプレハブ小屋がぽつんと佇んでいた。先輩たちは揃ってその小屋に入っていく、練習着に着替えてまた出てきた。ソフト部のような揃いのユニフォームではもちろんなく、三人とも私物の機能性シャツにジャージという格好で、侑希美さんの黒い野球帽だけが唯一野球部らしさを醸し出していた。

その野球帽の下からふんわりした三つ編みを二つ下ろして肩のあたりで揺らしながら、侑希美さんは私にグラブを放つてよこした。「スパイクもあるけど」

「いえ、平気です」グラブを受け取り、答えた。チノパンにスニーカーと、その日は軽い運動ならば問題のない服装だった。

もつとも、私はスカートを一枚も持っていなかったの、毎日似たり寄つたりの格好だったが。

「まあ、今日は慣らしたから。激しいことはやらないようにする」そう言いながら侑希美さんはバットを肩に置き、練習用の硬球がいつぱいに入ったオレンジ色のボールケースを足で引き寄せた。「とりあえず、これまでどおりの守備位置についてらん」
「見て、梓。ここが一塁だよ」その声に振り返ると、薄汚れたベースを持った杏菜さんあんなが、私のいるバッテリーボックスのあたりから三十メートルほど離れた場所に立っていた。

「遠い！」心底ぎよつとして、思わずそう叫ぶと、「十メートル近く違うからね」と潤子さんじゅんこが三塁にベースを置きながら言った。「ソフトボールに慣れてると、びつくりするよね」

私は一塁に向かってゆつくりと駆けた。^①バッテリーボックスから一塁へ——勝手知つたる一本道のはずだったが、これまでより十メートルばかり伸びたというだけで、何か神聖な経路を辿っているような心地になった。潤子さんもソフトボール出身なのだろうか、初めてこの距離を走ったとき、やはりこんな心地になったのだろうか。そう考えながら、杏菜さんの置いた一塁ベースを踏んだ。二塁を見ると、そこにもまた杏菜さんがベースを置くところだった。潤子さんは自分の置いた三塁ベースの前で、のんびりとストレッチを始めていた。

なんだか妙に楽しい気分になって、私はセカンドの守備位置についた。右も左も広々として、まるで新しい部屋に越してきた感じがした。それはつまり守備範囲が広がったということで、喜ぶよりは気を引き締めるべき変化だったが、大地の受け持ちが広がり、空の受け持ちも広がった、そう考えると A して、春の風の強く吹き過ぎてゆく空を、私は一度も任された経験のない外野手のつもりになって見上げた。

それからようやくバッテリーに目をやった。侑希美さんはバットを肩に担いだまま、足元のホームベースを少し退屈そうにスパイクの先でつついていたが、顔を上げ、私と目が合うと、ニツと嬉しうれそうに笑った。その後どんなことに巻き込まれるかも知らず、私は彼女に見とれた。生協の前で声をかけられたときとは違い、このときはただ、容姿の幼さに見入っていた。童顔の印象は最初からあったし、お下げ髪の効果もあっただろうが、練習着越しに浮かぶ未熟な線、渋みさえ感じるその無愛想な体つきに

は、そのときまで気付かずだった。大学二年生。どんなに若くても十九だったが、勝ち気な笑顔とポーズはまるで十一、二の少女を思わせ、ソフトボールというチームスポーツをまだ知らなかった頃の自分が確かに持っていた宝、あの孤独な自由の記憶を、その姿から私は不意に引き出したのだった。

それでぼんやりして見えたのだと思う。コッソ、と侑希美さんのバットから放たれた第一球目は、そつと私を揺り起こすような、弱く遅いゴロだった。にもかかわらず、私は見事にそれを取り損ねた——正面に構え、しっかりグラブに入れたはずが、体を起こしてみるとボールは足元に転がっていた。^②あれ、と私は左手にはめたグラブをばくばくさせながらボールを見下ろした。捕った感触はあった。球から目をそらしもしなかった。

「ドンマイ」潤子さんがサードの位置から声をかけてくれた。「大丈夫、すぐ慣れるよ」

その笑顔にはつきりと同胞の親しみが見え、頼もしい気持ちで私も笑みを返した。潤子さんはソフトのときもサードだったんですか、とあとで聞いてみようと考えながらボールを拾おうとしたとき、しかし早くも次の球が来て、一塁のほうへ転がったそのゴロに向けて私は走った。グラブはどうか間にか間に合わせたが、球はまた落ち、その小さな球体を捕まえることに私が淡い絶望を抱く間もなくまた次の打球が放たれた。

侑希美さんは私にだけ向けて打った。激しいことはやらないという約束は早々に反故にされ、一球一球の間隔は狭まり、打球音はみるみる尖^{とが}って鼓膜を刺し始めた。私は夢中になって受けた。選手としての脊髄反射^{せきすい}より、動物としての生存本能に近かった。実際、体勢を立て直さないうちに飛んできたライナーのうち一球は私の髪を掠^{かす}め、一球はふくらはぎに命中した。杏菜さんが立ち尽くしているのが時折視界の左端に見え、侑希美さんと呼ぶ潤子さんの声がやはり、時折聞こえた。どちらも遠かった。

向かい風に逆らいながら、私は拡大した守備範囲の中を駆けずり回った。それが守備練習ではなく通過儀礼であることはもうわかっていたが、いわゆるしごきとはどこか違うとも感じていた。侑希美さんの打球に込められていたのは、今後の覚悟や先輩たちへの忠誠といった、こういう場面で上級生が下級生に求めがちなメンタリティではないように思えた。腿^{もも}に、肩にと疑いようもなく意図的に打ち込まれる球から私が感じたのは何かもつと実際的な要求で、打球そのものからもたらされる教えは、そう

それが最後の一打だった。侑希美さんはバットを捨てると、かわりに拾い上げたキャッチャーミットをはめ、投げろと合図した。彼女もまた笑顔だった。そのそばにはいつの間にか杏菜さんがいて、ボールをケースに戻していた。私が取り散らかしたボールを集めて杏菜さんに送っていたのは潤子さんで、私が見たとき、彼女は一塁のあたりをうつむき加減にうろついていた。ノックが終わったことには気付いていたはずだが、顔を上げようとはしなかった。

⑤ 私はグラブの中のボールを握りしめ、もうそれを小さいとは思えないことを確かめてから、山なりに投げた。打ち身が熱を持ち始めていたが、おかげで風が気持ちよかった。

注 ソフトボール場……ソフトボールの競技場。ソフトボールは、野球とよく似た球技だが、野球と比べると、グラウンドが

狭い、使用球が大きくて重い、投手が下手投げを義務づけられている、などの違いがある。

ダートサークル……野球場でホームベースやバッターボックスを取り囲む円形の区画。

ダイヤモンド……ホームベース(本塁)と三つの塁に囲まれた部分。

鑿……木や石などを加工するのに使う工具で、刃と柄からなる。柄の頭を槌(ハンマー)でたたいたり、手で押したりして使う。

問一 傍線部①に「バッターボックスから一塁へ——勝手知ったる一本道のはずだったが、これまでより十メートルばかり伸びたというだけで、何か神聖な経路を辿っているような心地になった」とある。「私」の感じた「心地」はどのようなものであったのか。「神聖な経路」の意味を明らかにしつつ、説明せよ。

問二

A

に入る擬態語は何か。文章全体をふまえて最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア どきりと

イ おろおろ

ウ かつと

エ わくわく

オ ほつと

問三 傍線部②に「あれ、と私は左手にはめたグラブをばくばくさせながらボールを見下ろした」とある。このときの「私」の心情はどのようなものか。説明せよ。

問四 傍線部③に「同胞の親しみ」とある。ここでは「同胞」とはどのようなことを示しているのか。説明せよ。

問五 傍線部④に「そしてそれこそが、おそらくは侑希美さんの要求でもあった。元ソフトボール選手の私は彼女にとって不体裁な細工の施された彫像で、バットは槌、打球はいわば鑿だったのだ」とある。

1 侑希美さんの「私」への「要求」について、初めはどのようなものだとし「私」は認識していたか。最も適切な比喻表現を、本文中から漢字四字で抜き出せ。

2 「不体裁な細工の施された彫像」、「槌」、「鑿」の意味するところを明らかにしつつ、「私」が捉えている「侑希美さん」の「私」への「要求」の内容を説明せよ。

問六 傍線部⑤に「私はグラブの中のボールを握りしめ、もうそれを小さいとは感じないことを確かめてから、山なりに投げた」とある。ボールをもう「小さいとは感じ」なくなった「私」の変化の経緯を、本文全体をふまえて、百字以内で説明せよ。

第三問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

お盆休み。八七歳ひとりで暮らす祖母のもとに、親族が集まった。母と私と妹、それに妹の夫と三人の子ども（九歳男、六歳女、三歳男）と、私の夫と二人の子ども（三歳女、一歳男）だ。

祖母の家は、広く古い。縁側には「焼夷弾の跡」が残る。線香の香りのする仏間には、もう死んでしまった人たちの白黒写真がこちらを見下ろしている。押し入れの奥や、二階のふすまの向こうなどは、何十年も誰も触っていないので、魔界にでも通じていそうな気がする。七日間暮らした。

子どもたちは、非日常が珍しくてならない。親ではない大人と風呂に入りたがり、きょうだいではない子どもと隣あった布団で眠りたがる。やたらと仏壇に線香を立てては、「ちーん」をしたがる。いつも誰かが走り、誰かが求め、誰かと誰かが取り合いをし、笑うわ、泣くわ、わめくわで忙しい。

最新の家電に囲まれて暮らしている私と妹は、二槽式の洗濯機や、紙パック式ではない掃除機をうまく扱えない。パワフルな母は一人分の食事を司る。食器棚も冷蔵庫も、何せ「^①いちばん奥は魔界に通じている」ため、母でなければ、人数分の茶碗ちやわんを探し出すことさえできない。私と妹は、食器洗いや洗濯物干しなど、子どものお手伝いのような家事ばかりしている。

生粋きっすいの九州女である祖母は、男を決して台所に入れない。いつもゴミ出しをする妹の夫や、茶碗を洗う私の夫はやることがなく、その辺に寝そべる。その枕元を通り過ぎようものなら、「男の人の頭側を通ると出世せんよ」と祖母にたしなめられる。とはいえ、この地方の男が出世した話をあまり聞かない。そして、若い頃に夫を亡くして勤めに出ていた祖母は、美しく化粧した顔を毅然きぜんと上げて、男に頼ることがない。

「家族のコミュニケーションを大切に」といわれることがある。婚活などでパートナーに求める要素では、収入や家事・育児への協力など「条件的なものもあるが、各種調査ではやはり、「やさしさ」や「愛情を感じる」など「コミュニケーション的」なものが上位にくる。

だが、「家族のコミュニケーション」とはいったい何だろう。思ったことを言葉にして相手に伝え、相手の言葉を受け止めて反応を返すことがコミュニケーションだとすれば、本当にそんなことをやっている家族が、どれほどあるだろうか。

例えば、家族とともに過ごす時、フェミニズムを学んでしまった私は、不自由だ。今さら祖母の男尊女卑に突っ込みを入れることもできず、他方では母親の大きな家事負担を後ろめたく思いながらも、手伝い方がわからない自分に落ちこみ、同時に何もしない(させてもらえない)男たちに歯がみする。そんな思いを言葉にすることもないまま、家事と子どもの世話に追われる。

③ 唯一まともなコミュニケーションをした気がしたのは、九歳の甥おいに質問された時だ。

「ねえ、「男を立てる」ってどういうこと？」この子は大人の話をよく聞いていて、漏れ聞いたわからない言葉をまともに質問してくる。「うーん」と考え、私は答えた。

「女の人よりも男の人のほうが、男だつていうだけで、偉いとされることだよ。リョウヘイとショウちゃんとカツちゃんは男の子でしょ？ アオちゃんとヒイは女の子でしょ？ 男の子だからって理由で、アオちゃんとヒイよりも、リョウヘイとショウちゃんとカツちゃんのほうが「偉い」って言われること。リョウヘイはそれ、いいことだと思う？」

いとこたちの名をあげると、甥は「えー、思わない」ともじもじして、それでも続ける。

「だけど、男のほうが力が強いよ」

「かもね。でも、力が強いのと偉いのは別じゃんか」

傍らで聞いている母はワハハと笑っている。妹は真面目な顔で「力の弱い男の子もいるし、力の強い女の子もいるって」とつけ加える。少し離れた所にいた祖母は、「子どもが質問、大人が回答」という雰囲気だけを感じ取り、「あんたまあ、よく勉強して」と甥を褒める。妹の夫と私の夫は、別の輪で高校野球を見ながら小さい子どもたちを遊ばせている。やりとりが聞こえているかどうかは、わからない。^④ 微妙な葛藤かつとうを含む空気は、たちまち全体にまぎれ、何事もなかったかのように日常が流れ出す。

当たり前だが、家族といっても、興味も感じ方も違う別の人間だ。ほとんど異文化といっている。通常なら、コミュニケーションを図り互いを理解していくだろう。けれども家族はそれをしないまま、同じ屋根の下に眠り、食事をともにする。バタバ

タの日常のなかでは、互いの違いを掘り下げなくても、全体として回ってしまう。

おそらく「関係がある」とこと、「コミュニケーションしている」ことは、別の現象なのだろう。^⑤ 家族は、「コミュニケーションなき関係」だ。ある意味であたたく、ある意味では不気味だ。

私たちの「お盆休みの家族だんらん」というミッションは、微妙な空気を孕みつつも、無事に終わった。祖母と子どもたちが、体調を崩さず、元気に秋を迎えること——それさえかなえば、「理解し合う」などという高尚な欲求は後回しだ。^⑥ それが結局のところ、家事を司る者の論理なのだった。

(貴戸理恵『「コミュ障」の社会学』による)

注 焼夷弾……建物を焼き払う目的で使う投下爆弾や砲弾。

問一 傍線部①に「いちばん奥は魔界に通じている」とある。これは、台所のどのような状態を表現しているのか。説明せよ。

問二 傍線部②に「家族とともに過ごす時、フェミニズムを学んでしまった私は、不自由だ」とある。筆者はどのような点に不自由さを感じているのか。説明せよ。

問三 傍線部③に「唯一まともなコミュニケーションをした気がしたのは、九歳の甥に質問された時だ」とある。「まともなコミュニケーション」とは何か。本文中の表現を用いて説明せよ。

問四 傍線部④に「微妙な葛藤を含む空気」とある。これは、どのような状況を表現しているのか。六十字以内で説明せよ。

問五 傍線部⑤に「家族は、「コミュニケーションなき関係」だ」とある。なぜ家族がコミュニケーションなき関係と言えるのか。本文の内容をふまえて説明せよ。

問六 傍線部⑥に「それが結局のところ、家事を司る者の論理なのだった」とある。筆者は、祖母の家で七日間生活した体験から「家事を司る者の論理」を考えるに至った。ここで言う「家事を司る者の論理」とは何か。説明せよ。